

子どもたちの安心・安全な社会を目指して ～社会・地域ができること～



フォーラムの様子は当日夕方のNHK首都圏ニュースで取り上げられたほか、共同通信社の記事配信により埼玉新聞ほか31社が記事を掲載した

全日本社会貢献団体機構では、創立2周年を迎えた昨年、社会貢献活動の一環として、埼玉新聞社、全国地方新聞社連合会と共同で、社会貢献フォーラム「子どもたちの安心・安全な社会を目指して～社会・地域ができること～」を埼玉県さいたま市で開催した。

戦後60年を経て、日本は目覚ましい経済発展を遂げたが、その日本人の心の中に、「他者のために何かをする」「弱い立場にいる人々をみんなで支援する」といった精神が薄らいでしまっているのではないだろうか。そうしたなかで、「社会貢献」ということが、これからの日本の社会づくりの大切な鍵を握る活動になるであろう。なかでも命を大切に活動、青少年の健全育成に関わる活動は、今、本当に必要とされている社会づくりの要であるように思われる。そのために、社会や地域はいったい何ができるのだろうか——このような問題意識のもとで、今回の社会貢献フォーラムは企画された。

埼玉新聞社社長の丸山晃さんによる開会挨拶で始まったフォーラムは2部構成で、第1部では、国民的大ヒット曲となった『千の風になって』の訳詩・作曲を手がけた作家の新井満さんと、元NHKアナウンサーの山根基世さんの対談、第2部では埼玉大学教授の中村正宏さん、埼玉新聞社「子どもの安心・安全プロジェクト」担当の竹内健二さん、大阪府遊技業組合連合会青年部会長の南聖祐さんをパネリストに、山根基世さんの進行によるシンポジウムが行われた。

300席の会場は、ほぼ満席で、フォーラムに詰めかけた参加者は新井満さんの体験談や熱唱に感銘を受けたり、シンポジウムの内容を熱心にメモにとるなど、現在の私たちが抱える課題の重大さを再確認していた。最後に主催者を代表して、全日本社会貢献団体機構理事の松尾守人によるお礼と挨拶で2時間のフォーラムは閉会した。

- 開催日：平成19年12月13日
- 会場：コムナーレ（浦和コミュニティセンター）
- 主催：全日本社会貢献団体機構、埼玉新聞社、全国地方新聞社連合会
- 後援：埼玉県、埼玉県教育委員会、さいたま市、さいたま市教育委員会、NHKさいたま放送局、テレ玉、共同通信社、全日本遊技事業協同組合連合会
- 協力：NPO法人国際教育情報交流協会



埼玉新聞社 丸山 晃社長

社会貢献フォーラム【第1部】

対談

新井 満さん／山根基世さん



山根 私が子どものころは、自殺や犯罪につながるような陰湿ないじめはなかったと思います。同じクラスにお金持ちのお嬢さんがいて、おいしいものを食べたとか、高価なものを持っているとか自慢しているのを見て、多くのクラスメイトが、「もう、あの子とは口をきかない」などと言ったりしました。これもいじめといえはいじめなのでしょうが、2、3日もすれば、すっかり忘れて、もとの仲のいいクラスメイトに戻ってしまう。

新井 陰湿であるかないかに関わらず、いじめは時代や洋の東西を問わず、どの時代、どの世界にも存在してきました。いじめを簡単になくすことはできないと思います。私は、むしろ、命の不思議さを説いて聞かせています。自分には自分を生んでくれた母と父がいる。その母や父にも、それぞれ母や父がいるわけですが、これを10代さかのぼると、いまの自分が誕生するためには、1,000人の父母がいた計算になる。20代さかのぼると100万人です。しかも、その100万人の男女が愛し合い、交わることで、はじめていまの自分がここにいるんだ、と。



山根 自分の命は、奇跡のようなもの！

新井 私の母は90歳になるまで助産婦として働いた人で、「人は、一人ひとりそれぞれの役割を持って生まれて来ている。天才には天才なりの、障害者には障害者なりの役割がある。そのことをみんなが自覚し、思いやることで、いじめや虐待はなくなる」というのが、母の教えでした。そんな母から、私は生命の哲学を叩き込まれたのです。

山根 いじめや虐待を解決するヒントが、そこにあると……？

新井 基本は愛だと思います。命を慈しむ気持ちです。

お二人は同世代。これまでに番組で何度か顔を合わせたことがあるとのこと、対談も終始、和やかに進んだ。話題が大ヒット曲『千の風になって』のことになると、驚いたことに新井さんがオリジナルバージョンと、新曲の『この街で』を熱唱。満員の聴衆から熱烈な拍手が湧き起こった。

〔当日の対談から一部抜粋〕

新井満さん

1946年、新潟県生まれ。上智大学法学部を卒業後、電通入社。88年、『尋ね人の時間』で芥川賞受賞。作家、作詞、作曲家、写真家、環境映像プロデューサーなど、多方面で活躍中。日本ベンクラブ常務理事。『千の風になって』の印税やロイヤリティ収入の一部を投じて「千の風基金」を設立。平和や環境問題を中心に社会貢献にも積極的に取り組んでいる。

山根基世さん

1948年、山口県生まれ。早稲田大学文学部卒業後、NHK入局。『女性手帳』、『ニュースワイド』、『はんさむウーマン』、『新日曜美術館』、『ラジオ深夜便』など多数の番組を担当。07年にNHK退職後は、アナウンサーの広瀬修子さん、宮本隆治さん松平定知さんらとともに「ことばの杜」を設立し、朗読や読み聞かせ、言葉の教育などの社会貢献的な活動を行っている。



社会貢献フォーラム【第2部】

シンポジウム

パネリスト

中村正宏さん 竹内健二さん 南聖祐さん

司会 山根基世さん



いじめや虐待が社会問題化して、およそ四半世紀。この間、官・民とも、この問題の解決のためにさまざまな試みを行ってきたが、十分な成果があがっていないのが実状である。今回のシンポジウムには、異なった立場からいじめや虐待の根絶に取り組んでいる3名のパネリストが参加。それぞれの活動の報告から問題解決のヒントを探ろうという企画だった。

中村正宏教授は、長年、小中学校の現場で教育に携わってきた経験と、現在の研究を通して、真正面からいじめ問題に取り組んでいる。最近の学童の傾向として、「基本的な生活習慣が身につけていない」と指摘。その要因として、自然の中で遊ぶことが減ってしまったことによる自然体験の減少、祖父母や親戚などのふれあいが減ってしまったことによる家族体験の減少、学力や学ぶ意欲の低下などを挙げ、自然、人、本、家族、地域との関わりを広げていくことが、いじめ問題の解決のいとぐちになるのではないかという見解を述べた。

竹内健二さんは、埼玉新聞社が社を挙げて取り組んでいるいじめ、虐待に関するキャンペーンの内容と成果を報告した。埼玉県内の小中学校などに取材し、子どもたちの世界で起こっているいじめの実態を把握。その分析や提言などを新聞紙面で特集展開したという。また、全日本社会貢献団体機構が助成を行った「埼玉からいじ

め・虐待をなくすために」のキャンペーンハンドブックを制作。県民にいじめが身近にあることを認識してもらうことで、社会全体でいじめ問題を解決するための第一歩を踏み出そうと訴えた。なお、そのハンドブックは当日のフォーラム参加者全員にも配布された。

南聖祐さんは、2006年の社会貢献大賞に輝いた「未来っ子カーニバル」というイベントのまとめ役。このイベントは、クリスマスを両親とともに過ごせない施設の子どもたちを招いて行う、参加型あり、ショーありの手づくりイベントで、去年は2,000名近くの子もたちが参加して行われた。参加した子どもたちの中には、親からの虐待が原因で施設に暮らす子どもたちも少なくないが、イベントでは実に明るい顔を見せるという。最近では、会場近くの高校生にボランティアスタッフとして加わってもらっているそうで、地域全体で盛り上げる方向に持っていきたいと展望を述べた。

最後に、司会の山根基世さんが、「一人ひとりが自分の持ち場で、いい仕事をしていこうとがんばり続けていると、おのずと世の中はよりよいものになっていくんだと実感した」と感想を述べ、シンポジウムを締めくくった。



中村正宏さん

埼玉県内小中学校教諭、県教育局などを経て、現在、埼玉大学教育学部付属教育実践総合センター教授。



竹内健二さん

埼玉新聞社業務局企画部で、「埼玉からいじめ・虐待をなくすために」キャンペーンを担当。



南聖祐さん

2004年、大阪府遊技業組合連合会青年部会長に就任。約60名の青年部会員の先頭に立ち、多彩な活動を展開。